令和４年度　第２回飛騨高山SDGsパートナーシップセンター　会議録（要旨）

日　時：令和５年２月１３日（月）　１０時００分～１１時４０分
場　所：高山市役所　４階　特別会議室
出席者：飛騨高山SDGsパートナーシップセンター委員　１１名（内オンライン１名）、
高山市SDGs推進アドバイザー　２名、オブザーバー　１名
高山市企画部長、企画課長、企画課SDGs推進係長、企画課担当

会議内容（次第）

１．開会（清水副市長あいさつ）

２．センター長あいさつ

３．報告事項
⑴今年度の取組みについて
⑵飛騨高山 SDGs パートナー登録制度の登録状況等について

資料に基づき事務局が説明

細田センター長
・　市内の SDGs 認知度については「目標、内容ともすべて知っている」と「ある程度内容は知っている」人の合計が約 37%となっている。「聞いたことがある」を含めると認知度の割合は多くなる。世代別で見るとこの割合は違ってくると思う。市内の学校における SDGs 学習の実施状況について教えていただきたい。

白田委員
・　学習の一環として SDGs を取り入れている。また市からは市が作成した SDGs のパンフレットを各学校に配布していただいているところである。

細田センター長
・　認知度がさらに高くなっていかないと市内の活動等の参加へとつながらなくなる。実際に活動されている方々と、教育を結びつけて、その教育を受けた子どもたちが大

きくなるにつれて参加するという、そういう相互作用が生まれると良いと思う。引き続き教育面での取り組みもお願いしたい。

４．報告事項

前回の会議にて抽出された課題と対応について資料に基づき事務局が説明

細田センター長

- 事務局から資料のとおり説明があったが、委員の皆様から意見を伺い市内の取組みについて少し深堀りしたい。委員の皆様がどのような取組みを進められてきたのか、今事例に挙げられた取組みに対する感想や補足などもあれば話していただきたい。

高原委員

- 我々は観光支援に関する団体であるため、そういった観点から話したい。特に現在取り組んでいることが、人材育成というところに少し力点を置きながら令和 3 年度、4 年度と 2 年間継続して取り組んでいる。20 人ぐらいの若手の方々を中心に SGDs について、今後どのように取り組んでいくのかを話し合うなど研修を続けている。
- コンベンション協会ということで、一般の観光客以外に、市内での会議の開催など各種団体への誘致も合わせて取り組んでいる。今年度 3 年ぶりにインテックス大阪にて MICEEXPO という関西で大きな催し物があった。そのイベント内で SDGs 紹介コーナーの設置があり、出展について案内があったため、市と相談して、パンフレットの設置や飛騨高山フードバリアフリー協議会を紹介した市の SDGs 番組を放映した。国内を中心としたイベントではあったが、情報発信として取組みさせていただいた。

古瀬委員

- 金融という立場から話をさせていただく。岐阜県、愛知県の支部の会議等に出るが、やはり製造業は非常に SDGs に取り組む意識が高いと感じる。高山市の観光業においては、まだまだこれからもっともっと盛り上げていく必要があるのかなと、全体の印象としてはそのように会議に出ると感じる。
- 金融機関としては今私募債の発行の手数料を SDGs に関することなど社会に役立てていただくように銀行から還元したり、SDGs に関連した融資などの取り扱いを開始したところである。先ほども話ししたとおり、他地域と比べると、まだまだ取り組む必要があるのではないかと思い、お客様には説明している。産業構造の中でやはり製造業という割合が非常に少ない地域であるため、ある程度は仕方ないのかなとは思う

が、高山市全体で盛り上げていく必要があると感じている。

- 当銀行で取り組んでいることについては、初めて電気自動車を 4 月以降 1 台、営業車として配置するなど、環境に配慮した体制を各店よりも早く取り組んでいるところである。加えて行員全員が SDGs バッチを今着用しており、そういった意識を統一して、地域の社会貢献に努めていく取組みをすすめているところである。

張委員

- 我々の㈱多美人生開発では社会、環境、人の三側面から SDGs の取り組みをすすめているところ。社会面では、過疎化地域の農村資源を生かした「ツーリズム×農林業」や「ツーリズム×木工業」など旅行と何かを組み合わせ、連携しながら、地域の活性化に取り組んでいる。具体的な例としては高山から木曽地域をつなぐ国道 361 号沿いに色々な木工作家さんが点在しているため、この地場産業の活性化と地域を盛り上げることを目的にクラフト 361 というクラフト街道のイベントを開催した。去年は、メインの会場を朝日の道の駅の隣にある年 2、3 回しか使われない古民家を活用したが、イベント中の 10 日間において 1,000 人以上の方に来ていただいた結果となった。その他、高山以外でも、本巣市と静岡県藤枝市でもこのような観光支援の取組みを行っている。
- 環境の面では企業や地域のカーボンニュートラル化への支援をさせていただている。自社も旅行業を行っており、自社のツアーで発生した二酸化炭素を環境に還元することも行っている。
- 人の面では都市部の人材と農村地域の仕事をつなぐことにも取り組んでおり、今力を入れていることは NFT を利用した人流の拡大にも取り組んでいるところである。

長瀬委員

- 私は長瀬土建という建設会社で、建設業界のことも含めて話をさせていただく。SDGs 関して、建設業界が一番にやらなければならないことは子どもたちへの教育や、後は若者採用、ジェンダーなど、働きがいに関する経済成長であると思う。そして産業と技術革新、ICT をすすめる必要がある業界でもある。そのほか、住み続けられるまちづくりや災害に勝てる、そういったインフラ作りをしなければいけない。そういったことから皆様と一緒にパートナーシップということで、本当は我々の業界から底上げしなければならないと思う。このパートナー登録制度を見ても、実際に公共事業を行っている建設業者がほとんどいない。これが非常に問題であるということを認識している。ここに何が問題であるかと私なりに思うことは、先ほどの資料の中に SDGs について知っていますかという内容があったが、高山市の取り組みも含めて、その知っているという方が、宣言をしたり、登録するところまでつながっていかないところで、そこが非常に問題ではないかと思う。知っていても目標に掲げて自分が実行する

ということと、SDGs を知らない方への認識が中々すすまないということにも問題があり、これから取り組んでいくメリットになるのではないかと思う。

- 我々の業界において SDGs をやった場合に何がメリットなのかという話があるが、例として、登録制度のロゴマークが使用できて、ホームページなど色々なところで使用できるとか、就職ガイダンスのときに SDGs パートナーに登録していることをアピールできるなど表向きに何かベネフィットがあるような形がないとすすまないと思う。
- 我々の業界は社会貢献ということを昔からＣＳＲも含めずっとやってきているが、そのやってきたことが、今の SDGs という目標に当てはめるやり方を知らないということも、非常に問題に感じており、やっていることが SDGs につながっていることをわかるようになれば、どんどん SDGs は広がっていくと感じている。先ほど製造業の方が多いという話があったが、元々の仕組みが ISO からきているため、ISO に取り組んでいる製造業は自社の取組みと SDGs をつなげるノウハウがある。一方で非製造業はそういったことをできるところが少ないため、そういったところが弱点ではないかと思う。

小林委員

- まず始めに私の乗鞍白雲荘で取り組んだ事業について。乗鞍岳の自然や歴史を学びながらオリジナルグッズを考えるワークショップを開催した。普段なかなか乗鞍に行かない方々も参加いただき、環境資源とし誇り高いライチョウの生息環境や生態状況の説明した後、オリジナルグッズのデザインを考案していただいた。ライチョウという環境資源に深い関心を持っていただくなど色々なことを学んでいただく機会を提供できた。
- 続いて高山市環境審議会委員という立場から。先週審議会があり、市の取組みについて話した中で、同じような課題があった。認証制度など色々と取り組む中で、市民活動を中心とした取組みはすすんでいるが、事業者が取り組むことまでにはなかなかすすまないというということだった。例えば環境問題などの先進地である京都市をモデルに取り組まれているが、京都の場合は取組みを条例化にして、宿泊税などの法定外目的税などの色々なものを財源にしたり、条例での罰則規定などもあり事業者が取り組まなければならない体制を整えている。事業者に対してメリットを考えないと色々な取組みは浸透しないことを審議会の中でも問題として話に挙がった。

白田委員

- 私には障がいを抱える息子がいるが、この SDGs17 個の目標に沿って自分の生活を考えてみると 3 番の福祉に関して言えば、いろんな福祉支援を利用させていただいており、楽しく生活をするということが SDGs の本当に大きな目標であると思う。全て

の人が楽しく安全に暮らせることがそこにもつながり、8 番の働きがいのことで言えば、高等部を卒業した後に、社会人として息子が少しでも社会に関われるようにと考えると社会づくりに対しても何か考えていきたいと思う。あと 10 番に関しては、障がいに対する差別とかそういうものは今全く感じていない。そういった考えが地盤として高山市にはできていて本当にありがたくて感じている。このことを将来にも同じように残してほしいと思う。さらに 11 番に関連しては、町内の行事や防災訓練には息子を必ず連れて行くようにしている。それは障がいを抱えているということを知ってほしいということもあり、同じように子どもやお年寄り、そういった人にもすごい大切なことだと思って、ここにお年寄りや子どもさんがいることを知ってもらうことは大切なことだと思い、そういった必要性を強く感じている。

- 60 代 70 代の人の SDGs 認知度が低いということであったが、私の母が行っているデイサービスでは、包装紙を封筒にリサイクルしてそれを支所などに置いているが、すごく小さいことではあるが、それが SDGs につながってさらには未来の子どもたちのためになるということを作業している人たちに伝えることが必要かと思う。未来のために自分たちがやっているんだっという心を持てると思うので、そこをもう少し周知することでこの SDGs への認知度の向上や活動の活発化につながっていくのではないかと思う。
- バリアフリーに関して、昨年の夏休みに車椅子を利用している子どもとその親で、自由研究としてホテルにランチを食べに行く企画を実施した。ホテルのバリアフリー対応について皆で楽しく調べに行くことが目的であったが、大きなホテルのバリアフリールームの整備状況がとてもすばらしく、そういった配慮があることにとても驚愕した。
- 近所に大阪から移住してきた夫婦について。高山に移住した理由を聞いたら、水が綺麗なところを探していたと言っていた。郡上や大垣なども見に行ったが、高山を選んでくれた。このような移住してきた方の意見や住んでみた感想を参考にすれば、SDGs が掲げる目標の、みんなが住みやすいまちづくりへの近道になるのではないかと思う。

河上委員

- 高山商工会議所は 140 くらい事業所が連なる団体で、各事業所の業種も違うため全員で何かをやろうとはなかなか難しいが、フードロスの削減の取組みとして 3010 運動や今年度は、高山の自然を守ろうということで久々野の河川敷の清掃を行い、30 キロぐらいのゴミを集めた。
- ビジネス交流として、二つの事業所がタッグを組み、何か一つのことをやるためのパートナーを見つけるビジネスマッチングを行い、結果 7 件成立した。
- 中学校に訪問して、キャリア教育ということで市内事業所の紹介を行った。

- 次年度としてはキッズフェスタというような子どもたちにフォーカスを当てたイベントも考えている。
- 個人としての取組みとしては自動車関連の事業をやっているが市内の製菓所の商品を来場プレゼントに使用したり、あとは建て替えを計画している中で電気自動車の充電器の設置や、多目的トイレの設置や、スロープ、通路幅の確保などバリアフリー整備も取り組んでいる。
- 市内で様々な方の取り組みを皆さんに広める方法を検討していくことも必要だと思う。

六角委員

- 私どもでは中学校の共同学習や斐太高校の探求授業を 6 年ほど教えている。その中で SDGs をテーマにしたいというグループがいくつもあるが、ただ非常に気になるのは、悪いことから入ろうとするケースが非常に多い。例えば、限界集落、人口減少、都市問題など様々な都市問題が 17 の目標のどれに反しているから、それをどうにかしなければならないという入り方をしているため、この２、３年で良いところから考えていくように指導をしてきた。
- 例えば、ある地域の中学校では「五つの水源からすごく美味しい水が出てくる。その水をどうしたら将来持続可能で確保できるのか」をテーマに研究するなど、良いものを将来的に残すための問題や課題を考えるといった指導をしている。研究のスタートのアプローチを嫌なことからではなくて、自分の地域の特性や良いところから入るので、非常に生き生きとして SDGs に取り組んでくれるようになった。また、平和というテーマで考えると、すぐウクライナとロシアの話から入る子が意外と多い。そうではなく、まず自分たちはなんで仲良しなんだっということから考えてみて、このような良いところから入るアプローチの方法で SDGs を考えるようなやり方ですすめている。
- 高校生との取組みについては、「飛騨家具っていいよね。落ち着くよね。」「じゃあ調べてみよう」というアプローチで飛騨家具をテーマに学習し飛騨家具メーカーにヒアリングを実施。大手の飛騨家具メーカーは全て SDGs に取り組んでいた。理由については、小売店が家具メーカーの取組みについてお客さんに説明する必要があり、逆に小売店から取組みの要望があるため、飛騨家具メーカーは SDGs に取り組んでいるとのことであった。唯一弱いのが、材料の９割が海外輸入であった。そこで海外輸入を減らすにはどうすれば良いかを高校生と一緒に考えた。飛騨家具の素晴らしさから入り、弱いところについて考える。このような良いところから入る学習をこの６年間取り組んでいる。
- パートナー登録については、色々な方が SDGs に取り組んでいるが、どうして登録しないのか。家具メーカーはどこも登録できるはず。セールスの仕方や幅を広げる仕方

を今後考える必要がある。

佐野委員

- 先ほども少し話があったが、楽しいことや良いイメージからスタートするということはすごく大事だと思っている。私達の活動はそのゴミを減らす活動をしており、ゴミを減らすということはすごく難しく固いイメージがあるが、やはり楽しいというイメージを与えてから、きっかけが作れたら良いなと思い、ごみを出さないマルシェを開催した。6 月には無印良品さんといっしょに開催した。
- 私達の活動のモットーとして「1 人の 100 歩より 100 人の一歩」というのを念頭に活動しており、堅苦しいこととから始めるよりはマルシェって楽しいとか、そういう楽しいイメージから入っていくのはすごく大事なことだと思っている。
- 今年 8 月から、フードバンク飛騨高山にフードロスを減らすための活動の一環として、市民から家にある余剰な食品などを集めて、フードバンクに寄付するような活動も 8 月から月に 1 回行い、中日新聞などにも掲載され、私たちの活動の認知度が上がってきていることを感じている。今後もこういった楽しいところから始めるきっかけを与えていけるような活動をずっと続けていきたいと思っている。

オブザーバー（中部大学・古澤准教授）

- 中部大学として関わっている中部圏 SDGs 広域プラットフォームの活動も含めながら話をさせていただく。資料③における 4 番の世界への発信に関連して。例えば英語版の SDGs パートナー事業者を紹介するパンフレットを作成する。海外の観光客にも見てもらえるようにして、さらにまたこのパンフレットを見た市内の他の企業が自社でもできることを見つけたり、意識してもらうなど取組みの広がりにつながるのではないかと思う。
- 中部圏 SDGs 広域プラットフォームでの取組みで異業種交流会を開催している。この交流会の中で SDGs に関連した商品、サービスも宣伝してもらうことで、参加企業もこういったことを SDGs につながるのかなど新たな発見、気づきなどにつながっていく。
- 私が企画しており、中部大学や中部 ESD 拠点が深く関わっているプロジェクトについて紹介させていただく。毎年１回、水と流域をテーマとしたフォーラムを開催しており、今月２月２３日に愛知県長久手市にて「いのちをつなぐ水と流域　地球市民対話プロジェクト」と題して地域対話フォーラムを開催する。

資料に基づき地域対話フォーラムについて古澤准教授からご説明

細田センター長

- 第1回の会議での課題については、これで既に解決されたというものではなく、高山市がSDGsを推進していく中で今後も継続的に取り組んでいくべき課題であるということだと思う。今回、委員の皆様との議論を重ねる中で、新たな課題が見えてきたのではないかと思う。簡単に私の視点から3点あるのではないかと思う。
- 第1点目は、色々なところで多様な活動が日々の生活の中で行われている。ただし、その活動がSDGsの17の目標に紐づけられていないということで、広がりという点からすると少し限界があるため、これらの活動がつながり、広がっていくチャンスを見つけたいというふうに感じた。
- 2点目は、今のことと重なるが、その様々な活動がもう少しつながりを持ったらどうだろうか。教育の場とか、あるいは事業活動の場などで、今話を伺っていると、もう少しつながってシナジー効果が出てくるべきものではないかと感じた。
- 3点目は、せっかくSDGsの活動を認識してやっているのにパートナー登録にまでに至ってない。ぜひ、これは市の方々や、このパートナーシップセンターも含め、努力をして、登録につなげて、登録状況を発信して、市内の企業、団体がやっているんだったら自社も取り組もう、というようにつながったらさらにSDGsの活動は広がるのではないかと感じた。
- その他にまだ論点はあると思うので、事務局の方で少し今の私の指摘も踏まえ、まとめてもらい次回の課題として示していただければと思う。また次年度も引き続き新しい課題、取り組みについてこの場で状況をお知らせいただいて、議論を続けていきたい。

５．意見交換

細田センター長

- 情報の共有として、私の東海大学はSDGsに対して研究所を作るなど、積極的に取り組んでいる。昨年5月のセンター設立の状況を大学に報告したところ、大学の同僚が高山市のSDGsに関する取り組みに非常に興味を持ってもらった。そこで7月にSDGsを研究分野の対象としている人と一緒に高山市に訪問させていただき、東海大学、そしてオブサーバーの中部大学と市役所の関係部署と情報交換をさせていただいた。そしてそこでSDGsに関することも含めて高山市の取組みや現状など、大学で研究している内容や各分野について互いに情報交換し、今後どのような展開が可能かどうかを議論する場を設けさせていただいた。
- 今後は各教授が高山市をフィールドに研究したいテーマを設定し、研究を進めていければ良いと思っている。特に2点、一つは当然のことながら、気候危機にどうやっ

て高山市が取り組んでいくか。どうやって、2030年までに2013年対比で温室効果ガス46%マイナス、そして2050年にはカーボンニュートラル、これをどのように達成するかということを研究者も含めて議論させていただければと思っている。

- 二つ目はサーキュラーエコノミー循環経済について。高山市のゴミのパフォーマンスは必ずしも岐阜県のレベルと比べてもあまり評価ができるものではないため、循環経済を作るのにはどういうリサーチをして、どのような仕組みを高山市に導入すれば良いのか、その点も東海大学や中部大学のエキスパートも含めて研究させていただけたらと思っている。
- 高山市のSDGsの取り組みの海外への発信なども検討に思っており、これも東海大学にサステナビリティセンターがあるため、そこで高山市のSDGsの取組みを英語でシステマティックな形で発信させていただきたいと思っている。

古里SDGs推進アドバイザー

- 私が関わっているコミュニティ財団の取組みについてご紹介をさせていただく。コミュニティ財団とは、地域の内外の様々な個人企業からの寄附金などの資金を原資にNPOやソーシャルビジネスへの取組みや、また個人・団体に対して助成などを行い資金面での支援を行うとともに、活動自体の支援も行い地域の中で良いインパクトの創出を目指す財団となっている。地域の中で新しい財布を作るようなイメージの取り組みを今進めている。今年の5月に、財団自体が一般財団法人として組成され、その後、年内には公益財団法人という形で認証を取るスケジュールで進んでいる。
- こういった組織ができると、どういったことにプラスにつながるかと言うと、当然地域の中には様々なお金の出し手がいて、当然、国や行政、あとは市中の金融機関も、そういったところにお金を拠出したりする機能を持っているが、もう一つ新しく、地域の中に寄附みたいな温かいお金をベースに、そういった社会活動に取り組む人たちの財源になりうるお金の流れというのを一つ作り出すことで、よりふくよかな地域内の活動を支える仕組みになっていくと思っている。
- 具体的に何がいいのかと言うと、地域の中に休眠預金の受け皿ができるというのが一つ、非常に大きいことではないかと思う。年間大体500億から700億近くの休眠預金と呼ばれる資金というのが財源として出てくるわけで。休眠預金というのは金融機関内など、なかなか手つかずになって動きがない状態で止まっているような資金のことを言い、これらが2018年に法律ができた関係で、そういったお金を国の関係団体が管理をしながら、地域の中で活用する団体に資金分配をしていくという仕組みが実はスタートしている。実際今700億円のうちの、約100億円しか、各地域で活用されていないというような実情である。この財源というのは、地域の中の新しい社会活動のための資金源としては、非常に有効なお金であり、政府を挙げてこの活用を

取り組んでおり、こういった財団が実は岐阜県にも飛騨地域にも1個もない。そのため、こういったしっかりとしたお金の受け皿を作ることで、また、そういった社会活動のため、もしくはSDGsの取り組みを実際になされる方たちのために資金を流していく、新しいお金の流れを作ることができるというのが一点。

- もう一つは遺贈という、お亡くなりになる方の遺言をベースに寄附をするという仕組みが今整えられている。こういったところのお金だとか、若しくはそういった不動産みたいなものもしっかりと財団で受け止めて、それを地域の様々な活動に使っていただくような、そういった還元の仕方が可能になり、こういった仕組みを作ることで市中の金融機関若しくは行政、あとは市民団体の方々と、また新しい協働・共創の形を作れると思っている。そうすることで先ほどセンター長もおっしゃられたように、より取組みの幅が広がってシナジーを様々なところで生むことができると思っているので、ぜひまたこちらにも注目をしていただきたい。

関SDGs推進アドバイザー

- 私は内閣府のSDGs未来都市の選定委員でもあるため、高山市がどのようにSDGs未来都市を実行し、しっかりとKPIを達成していくのかっというのを、政府の委員としても、しっかりと注視するとともに、合わせてアドバイザーとして一緒に並走して走っていきたいなと思っている。今日、皆様のご意見を聞いた話でいくと、やはり実装していく力がまだまだ高山市は弱いと思った。これだけのメンバーが揃っているので、細田先生がまとめていただいたようにシナジーがもっと高みに、さらに幅広く実際には動ける地域であると感じている。
- 全国のSDGs未来都市を見た中で、高山市の有効な資源が何かが見えてきた。それについて今日、提案を申し上げたい。特に環境分野について。環境分野といっても基本的には産業にしていく環境分野というふうに思っていただければと思う。

資料に基づき市の森林を活かした林業の取組みの方向性について関SDGs推進アドバイザーからご説明・ご提案（以下抜粋）

- 高山市は日本一、森林面積が広いが、これを全く活かせていない。私がSDGs未来都市のアドバイザーになるまでは当然、北海道の自治体が一番広い面積を有していると思っていた。この森林を活用した産業を作っていくようなことが実はSDGsとっても重要だと思う。
- 森林の活用については、国有林からか若しくは民有林からすすめていくのかなど戦略を立てて今後考えていく必要がある。
- 高山市の森林の中で広葉樹の天然林が半分以上あるということが最も重要で、森林活用をすすめていくことで圧倒的な強さになっていく。先ほど飛騨家具の話があっ

たが、飛騨家具の大半はこの広葉樹産なので、この広葉樹をうまく使うことによって、飛騨家具でさらに儲かることができる。また、SDGs に関連した認証の話だと、例えばフィンランドから来た木材で作っている家具を日本の家具として輸出するときに、EU は受け取らない。日本の木で作った家具なのかっと聞かれた時に、海外から来た木材で作った家具であると言った瞬間にゲートが閉まってしまう。日本の木で作っていないと認証が下りず輸出できないぐらいまで原産材料の使用が今重要となっている。

- 林業の形態というとどうしても木を切るというイメージしかないが、木を切るこの林業形態というのが 2015 年の統計を見ると、かなり小さくなってきている。市内の販売経営体当たりの売上高が 2015 年で 140 万円しかなくほとんど産業になっていない。
- 日本の木材がヨーロッパから持ってきた木材より高い理由は資料のとおり最終的にエンドユーザーに渡るまで非常に細かい産業に分かれている。林業と言っても、実際は製品のところに行くとこれはもの作りで 2 次産業の分類となる。最終的に売っていくときには 3 次産業となり、実際の産業分布図を考えると、最初の木を切るまでの林業を考えるのではなく、エンドユーザーまで届けることまでをオール産業として捉えていく必要がある。資料にある西粟倉村については、1500 人しかいない小さな村だが、この村内で木を切るところから売るところまで一気通貫で全てやっている。この西粟倉村モデルは原木を切って加工して、家具用材、住宅内装材、さらには DIY 製品までも取り扱い、一つの企業が全てをやることで売上高を伸ばし、10 年で 4 億円までの企業に作り上げ、産業として構造を改革していくことがこれからは重要だと思う。
- 高山市のこれからの林業は、木を切ることだけではなく、入口から出口までを産業とする林業をすすめ、山を守っていくことを目指してほしい。この林業をすすめていくうえで、まずは、各工程にどのような企業がいくつあって、どのぐらいの売上高があるか、また従業員は何人いるのかなどを調査する必要がある。高山市は元々江戸時代から木材の地域であるので、より複雑になって高止まりの産業構造になっており、これらを解明する調査をお願いしたところである。最終的にはこの林業産業としてどの工程の産業を大きくするのかを金融機関も交えながら決めていくことが、SDGs にとっても重要である。また、逆にどこかの工程を捨てることも考える必要がある。ショートカットしないと産業は絶対儲からない。そして今後、既存のルートを変えていくのか、若しくは西粟倉村のようなモデル事業として違うレイヤーを作ってすすめていくのかを検討していく。
- 市内には製材場が足らないのではないかと思っている。加えて製材場があるとバイオマスができるため、バイオマス発電もできないかと思っている。
- 今林野庁では、出口戦略に力を入れて取り組んでおり、入口のところでは森林贈与税

を作って森を守るところにお金を入れたり、その出口には、CLT 板の普及や第２の森という形で都市部で木材をたくさん使えるように建築基準法を改定して木材の柱で高層ビルが建てられる取組みもすすめられている。

- SDGs 未来都市をとった和歌山県田辺市では市が所有者から森を預かり、代行して森林を活用する取組みをすすめている。また、西粟倉村では信託法に基づき三井住友信託銀行が代行して進めている事例もある。
- 全国の SDGs 未来都市 150 ヶ所を見ている中で高山市の最大の強みは長瀬土建さんがいることだと思う。今までちょっと違う発想が必要だったが、どうやったら違う発想を持ち込めるかと思ったときに、昨年、長瀬土建さんの発表を聞いてこれだと感じた。その理由は土木事業者が木を切って製材していくことが実はすごく良いことで、林道整備ができ、木を切って運べる、これを一つの企業ができること。また、土木事業者は資金力があること。さらには重機を持っており、多様な人材も抱えていること。土木事業者が林業に参入することで、非常に大きい産業に一気に転換できるため、このモデルとしてぜひ高山市に取り組んでいただきたいと思う。
- 森林日本一の高山市として SDGs 未来都市の中でできればこれを活かしていただき、少し思い切った実践のある事業計画に舵を切っていただきたいと思っている。

細田センター長

- 非常にワクワクするような話になってきて、高山市がかなりリードできるような、そういう環境にはあるのかもしれない。そのためにはやるべきことについては、関アドバイザーのご指摘に対して、事務局で具体的どういうアクションプランにつなげていくのかを長瀬委員のご支援も必要であるかと思うが、ぜひ検討していただきたい。
- 関アドバイザーからは森林のことや、森林と水がつながっていること、そして一方では中部大学の古澤先生の方からも水というものもいろんな捉え方があったり、文化の話や生態系の話もある。そうすると高山を中心に色々なつながりができてくるなと思い、非常にワクワクしながら聞いていたわけであるが、ただ、実行・実装しなければならない。一遍にはできないかもしれないが、少しずつできることから始めてぜひ高山のメリットを実現させていきたいと思う。
- 今回の会議により課題もまたいくつか出されたが、ぜひこれを一つ一つ対応していきたい。また、関アドバイザーから大きな枠組みの提案があったが、小さな課題と大きな枠組みをつなぎ合わせて高山の SDGs 未来都市を形成していきたいと思っている。

６．閉会